

令和 5 年 6 月 13 日現在

機関番号：62608

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K13083

研究課題名（和文）『玉水物語』にみる種と性の越境

研究課題名（英文）Species and gender transgression in the Tale of Tamamizu.

研究代表者

安岡 佳穂子（井黒佳穂子）（YASUOKA, KAHOKO）

国文学研究資料館・古典籍共同研究事業センター・特任助教

研究者番号：90743104

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では御伽草子『玉水物語』の特色を明らかにすることを目的として、作中における種と性の越境について検討した。従来「異類物」に分類されてきた『玉水物語』は、異類から人へ、男から女へという、二重の変身を果たしている。この二つの変身について、「異類婚」と「異性装」の観点から分析し、類似の構造を持つ説話や御伽草子、中世王朝物語と比較した結果、『玉水物語』は中世王朝物語や「公家物」に分類される御伽草子の影響を受けており、「しのびね」型の構造に近い物語であることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

『玉水物語』は「しのびね型」の物語構造の中に、異性装と狐女房譚のモチーフを取り込むことで、身体的な性と社会的な性を描き分け、これまでにない多様性の物語として成立しており、しばしば類型的と批判的に評価されてきた御伽草子の豊かさ、現代の創作にも通じる姿が認められたことは大いに意義があると考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to clarify the characteristics of the otogi-zoshi, The Tale of Tamamizu, by examining the transgression of species and gender in the work. Traditionally classified as a tale of animal, The Tale of Tamamizu undergoes two transformations, from animal to human and from male to female. These two metamorphoses are analysed in terms of 'marriage with animals' and 'cross-dressing', and compared with similarly structured narrative literature, otogi-zoshi and medieval dynastic story. The Tales of Tamamizu were found to be influenced by medieval dynastic story and the 'a tale of Nobility' in the otogi-zoshi, and to be close to the 'shinobine tale' structure.

研究分野：日本中世文学

キーワード：御伽草子 異類婚姻譚 異性装 中世王朝物語

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 古典文学には多くの変身が描かれるが、中でも狐は美女の姿に変身することが多く、中国や日本の文学作品にしばしば登場し、狐女房譚として親しまれてきた。『玉水物語』は市古貞次の分類では『木幡狐』や『玉藻の草紙』と同じく「異類物」に分類されるが、従来の狐女房譚と比してかなり異質な作品であり、他の狐女房譚との相違点を明確にすることで、特色が明らかになると考えた。

(2) 『玉水物語』の先行研究は、川村絵美「中世小説『玉水物語』の研究 狐の純愛物語として読む」(『古典文学研究』六号、一九九八年二月)、沢井耐三「狐と狸、中世的相貌の一面 『玉水物語』『筆結の物語』考」(『説話論集 絵巻・室町物語と説話』第八巻、清文堂出版、一九九八年八月)、安藤みな子「御伽草子『玉水物語』考 『聊斎志異』封三娘との比較」(『愛知大学国文学』四十四号、二〇〇四年十二月)、穆雪梅「『玉水物語』と「封三娘」(『聊斎志異』)の比較 影響関係に関する有無の再検討を中心に」(『東亜漢学研究』二〇一七年特別号、二〇一七年二月)、真下美弥子「『玉水物語』構想論」(『朱』六十号、二〇一七年三月)など、他の狐女房譚や中国文学との比較が主であった。しかし、狐である玉水が姫君に近付くため、男ではなく女に変身するのは、『稚児今参り』などの「異性装」に近いのではないかと考え、より分析が必要ではないかとの思いがあった。

## 2. 研究の目的

(1) 狐女房譚には『木幡狐』や『信太妻』のように、妻として母親としての性格が強いものの、『狐の草紙』や『玉藻の草紙』のように、人を誑かす怪異として描かれるものなど、いくつかの傾向があることから、これらの狐女房譚を整理することで、『玉水物語』が狐女房譚のどの文脈に連なるものなのか、検討することを目的とした。

(2) 御伽草子は四百種以上の作品が現存し、擬古物語や軍記物語、説話、芸能など様々な文芸の影響を受けている。この膨大な作品群について、これまで先行研究から分類案が出されたが、現在最も一般的に用いられているのは、市古貞次が『中世小説の研究』(東京大学出版会、1955年)において、登場人物の階層から公家物、僧侶物、武家物、庶民物、異国物、異類物の六つに大別した分類案である。御伽草子を採り上げる際、最初にどのグループに属するのか注目されやすいため、しばしば類型的であると批判されることも多い。しかし、『玉水物語』に描かれた変身を「異類婚」と「異性装」の二つに分けることで、固定化された分類では見えてこなかった部分が明らかにできるのではないかという推察があった。

## 3. 研究の方法

(1) 『日本霊異記』上巻第二縁をはじめとする、説話文学に登場する狐女房譚、御伽草子の「異類物」に分類される作品で、『狐の草紙』、『木幡狐』、『玉藻の草紙』などを取り上げ、『玉水物語』との内容比較を行った。

(2) 作中に異性装が描かれている『とりかへばや』、『有明の別れ』、『新蔵人物語』、『稚児

今参り』、『秋月物語』などを取り上げ、異性装を行う人物の「変身の理由」、「性自認」、「変身後の展開」に注目し、分析を行った。

#### 4. 研究の成果

(1) まず始めに日本における狐の異類婚姻譚について整理した。日本の古典文学に登場する狐は中国の影響を受けているものが多いが、狐が人間の男と結婚する話として、唐代の怪異小説『任氏伝』があり、大江匡房が康和三年(1101)に記した『狐媚記』や、建保七年(1219)に編まれた『続古事談』にも任氏の名が見えることから、日本でも古くから親しまれてきた物語だと分かる。九世紀に編まれた仏教説話集『日本霊異記』上巻「狐為妻令生子縁第二」にも狐が登場する。本話は狐が産んだ子供が一族の祖となる始祖譚で、以降も御伽草子『木幡狐』や、説経節『しのだつま』など、いわゆる「狐女房譚」の系譜として受け継がれている。一方で五行思想から狐との婚姻が害になるという話もあり、『今昔物語集』巻十六「備中国賀陽良藤為狐得観音助語第十七」(原話は『善家秘記』(『扶桑略記』第二十二寛平八年九月所収)、『観音利益集』四十五、『元亨釈書』二十九拾遺志に同話)には、狐が化けた美女に誑かされて、正気を失ってしまった男の話が載る。『大日本国法華験記』巻下「朱雀大路の野干」(『今昔物語集』巻十四「為救野干死写法花人語第五」、『古今著聞集』巻二十魚虫禽獣第三十「或男朱雀大路にして女狐の化したる美女に遇ひて契る事」に同話)も同様の思想に基づくが、こちらは狐が自ら犠牲になることで難を逃れるという話になっている。『玉水物語』には主人公の玉水が、婚姻で姫君に害が及ぶことを恐れ、男に化けることを思い止まる場面があり、先行説話の影響が見て取れた。

(2) 市古貞次の分類では鳥獣虫魚や草木、器物など異類が擬人化され、活躍する作品の大半が異類物に分類される。異類物は異類が人間社会に入り込み結婚する 怪婚譚と、異類だけで社会が構成されている 純粋な異類物(歌合物、恋愛物、軍記物、遁世物、その他)に分けられる。『玉水物語』も怪婚譚と見なされている作品だが、人間と結ばれることはなく、想い人の入内によって恋破れ、人間社会から去っており、従来 of 怪婚譚とは展開を異にする。さらに『玉水物語』では、主人公たちが折に触れて和歌を贈答し、紅葉合という風雅な催しが行われ、主君のもとを去る時に長歌を添えて文を残すなど、王朝物語的な雰囲気が色濃く見られることから、異類物だけでなく公家物としての性質も備えていることが分かった。

(3) 変身及び変装は異なる社会に侵入するための常套手段として用いられるが、異性装には、「目的達成の手段として一時的に行われる場合」と、「やむを得ない事情により幼少時から継続的に行われている場合」に大別できる。『玉水物語』では「姫君に近付くための一時的な手段」として女房に化けており、同様の理由で変身した『稚児今まいり』や『秋月物語』が、相手と結ばれることで解除したのに対し、狐であった玉水は姫君の身を慮り、最後まで変身を解除せず、「自覚的な性」と「社会的な性」の狭間で苦しむことになった点は新しい。

(4) 御伽草子以前に成立した中世王朝物語では、「男性との関わりよりも同性との関係を重んじ、心を寄せる相手として積極的に同性を求め、女同士で親愛関係を築いていく女性たち

1」が登場し、しばしば同性愛的な傾向が見られる。彼女たちは男の家族や、姫君の女房として登場し、「無力な男」に代わって姫君の窮地を救うべく行動し、最後まで姫君と良好な関係を築いた。『玉水物語』も月を見て物思いに沈む玉水を訝しむ姫君、紅葉合わせでの玉水の行動、養母の看病のため里下がりした玉水と姫君たちとの和歌の贈答など、女性同士の強い信頼関係が描かれる。玉水が「自覚的な性」を排除したことで、中世王朝物語の系譜に連なるプラトニックな 女たちの楽園 がいっそう浮き彫りとなった。

(5)しかし、玉水たちが築き上げた 女たちの楽園 は、帝の介入によってもろくも崩れ去ってしまう。愛し合う者同士が心ならずも引き裂かれ、女は帝の寵愛を受けて繁栄し、男は出家(あるいは死ぬ)という展開は、中世王朝物語『しのびね』を原型とする しのびね型 の作品として知られる。中世王朝物語を象徴する しのびね型 の系譜は、御伽草子においても引き継がれ、類型の作品群が作られた。『玉水物語』も入内によって失恋し、最後には失踪する展開は しのびね型 作品と類似する。また、典型的な しのびね型 とされる御伽草子『しぐれ』には、「呪詛された男が愛する姫君を忘れる」という場面が存在するが、この「愛に関する呪法」は『玉水物語』にも見られる。失踪する決意を固めた玉水が、これまでの経緯を記した文を入れた箱を姫君に託す。この箱は「人に飽かれず、年月を経ても老いることなく、相手の愛を増す」というもので、入内した姫君が帝の寵愛を独占できるものだとなれば、『しぐれ』に登場した呪詛を反転したような効果を持つ。『しぐれ』とは対照的に、叶わぬ恋に苦しみながら、姫君の繁栄を祈った玉水の献身が際立っている。

(6)玉水は別れに際してこれまでのいきさつを書いた文を残しており、そこには一首の長歌が添えられていた。御伽草子には、作中で長歌が詠まれている作品がいくつか存在する。

『物語和歌総覧 本文編』(風間書房、1974)から抽出すると、『秋月物語』、『朝顔の露』、『魚の歌合』、『扇流し』、『桜の中將』、『狭衣の草子』、『玉造物語』、『玉水物語』、『なでしこ物語』、『姫百合』、『伏屋の物語』の十一作品が該当する。さらに『物語和歌総覧 本文編』には収載されていないが、『しぐれ』、『志賀物語』、『若草』、『四十二の物争ひ』などにも長歌が含まれる伝本が確認できることから計十五作品となる。これらを市古の分類に照らし合わせると、公家物に分類される作品群のうち、八割が公家の恋愛譚に賊する作品群となる。

長歌は『万葉集』以後、平安期における短歌の隆盛とは対照的に、急速に衰退していったが、勅撰和歌集や物語、日記などにおいて、わずかに命脈を保っていた。既に「一時代前の歌体」であった長歌は、「特別な教養を必要とし、特にあらたまつた際の表現<sup>2</sup>」であった。『玉水物語』の場合、玉水は長歌の中でいきさつを述べた後、「常に弔ふ 心あらば 後の世までの掛橋と なりても君を 守りてん」と詠む。たとえ傍にいられなくとも、姫君の幸せを願い、行く末まで見守るという「誓願」であり、長歌本来の役割に近いものであった。

(7)『玉水物語』は「異性装(変身)」によって、異性愛から同性愛へと趣向を変えるものの、入内の決定によって破綻し、姫君は繁栄、玉水(狐)は失踪という結末を迎えるという点は、 しのびね型 と共通した構造を有する。従来、狐を主人公とするゆえに「異類物」として分類されていた『玉水物語』だが、「公家物」の観点から照射してみると、男女の愛

と異性装、理想化された同性社会、しのびね型 という構造など、中世王朝物語の影響が随所に認められる。しかしながら、『玉水物語』の魅力は「異性装(変身)によって異性愛から同性愛に転換する」という趣向にあり、玉水が「狐が美女に変身する」というモチーフを兼ね備えていたからこそ可能なことであった。

『玉水物語』は中世王朝物語から引き継がれた 女たちの楽園 の世界を取り込むことで、これまでにない純愛物語に昇華させつつ、従来の異類物の範疇を超えて、多様性の物語として生まれ変わった。時に類型的、模倣作と見なされがちな御伽草子の真の豊かさは、型と型の余白に生まれる奇跡的な新しさであり、メディアの垣根を越えて多様な物語が駆け合い、新たな作品となって生み出されていく。これは現代の創作にも通じており、現代の多様性が内包する課題や、物語史の研究のさらなる発展に寄与することができれば幸いである。

#### 引用文献

1. 宮崎裕子「女たちの世界 『有明の別』が描いた 女性同士の夫婦 からー」(辛島正雄・妹尾好信編『中世王朝物の新研究』新典社、2007)
2. 久保木哲夫「長歌とその意味」『折の文学 平安和歌文学論』(笠間書院、2007)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 井黒 佳穂子	4. 巻 48
2. 論文標題 公家物として見る『玉水物語』	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 国文学研究資料館紀要 文学研究篇 = The Bulletin of The National Institute of Japanese Literature	6. 最初と最後の頁 79 ~ 104
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24619/00004445	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------